

【 アンティパスハのトロパリ 第7調 】

ハリストスかみよ、はかはふうぜられて、
 神 墓 封

いのちなるなんぢははかよりかがやき、もん
 生命 爾 墓 輝 門

とざされて、しゅうじんのふっかつなるなんぢは
 閉 衆 人 復活 爾

もんとのまえにたち、なんぢのおおいなるあ
 門 前 立 爾 大 憐

われみによりて、かれらをもつてただしき
 因 彼 等 以 正

しんをわれらにあらためたまえり。
 神 我 等 改 給

【 アンティパスハのコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。い
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

まもいつもよよに、アミン。
 何時 世 世

ハリストスかみよもんぢたるに、なんぢいりし
 神 門 閉 爾 入

とき、けんきゅうをこのむフオマはてをもつてい
 時 研究 好 手 以 生

のちをほどこすなんぢのわきをさぐりて、
 命 施 爾 脅 探

た の し と と と も に よ べ り 、 な ん ぢ は わ れ の
 他 使 徒 偕 呼 爾 我
 し ゅ お よ び か み な り 。
 主 及 神

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じ ゅ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 の 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。こうえいはちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 使徒の第3調 】

司祭) ^{つし き} 慎みて聴くべし、^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{わ しゅ おおい} プロキメン、吾が主は大なり、^{そのちから またおおい} 其力も亦大なり、^{そのちえ はか がた} 其智慧は測り難し、

わ が しゅ は お お い な り 、 そ の ち か ら も ま た お お
吾 主 大 其 力 も 亦 大
い な り 、 そ の ち え は は か り が 難
其 智 慧 は 測 り 難
た し 。

誦經) ^{しゅ ほ あ} 主を讃め揚げよ、^{けだしわれら かみ うた ぜん} 蓋我等の神に歌うは善なり、^{けだしこ たの こと} 蓋是れ楽しき事なり、

わ が しゅ は お お い な り 、 そ の ち か ら も ま た お お
吾 主 大 其 力 も 亦 大
い な り 、 そ の ち え は は か り が 難
其 智 慧 は 測 り 難
た し 。

誦經) ^{わ しゅ おおい} 吾が主は大なり、^{そのちから またおおい} 其力も亦大なり、

そ の ち え は は か り が た し 。

【 ^{アポストロス} 使徒經 14 端 聖使徒行實 5 章 12 節～20 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしとこうじつ よみ} 聖使徒行實の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^か 彼の ^ひ 日、^し 使徒 ^て の手 ^よ に由りて、^{みんかん} 民間 ^{おお} に ^{きゆうちよう} 多くの ^{きせき} 休 徴 ^{おこな} と奇蹟 ^{しゆうみなころ} とは行 ^わ れたり、^{しゆう} 衆 ^{みな} 皆 ^{ころ} 心

^{いつ} を一にして ^{ろう} ソロモン ^あ の廊 ^よ に在り。 ^{もの} 餘 ^{あえ} の者 ^{かれら} は敢 ^つ て彼等 ^{しか} に附 ^{たみ} かざりき、 ^{かれら} 然 ^{あが} れども民 ^{あが} は彼等 ^{あが} を崇

^{なんによ} めたり。 ^{しん} 男女 ^{もの} の信 ^{ますます} ずる者、 ^{おお} 増 ^{しゆ} 多く ^つ 主 ^{ひとびようしゃ} に就 ^{ちまた} き、 ^か 人 ^{いだ} 病 ^{ゆかおよ} 者を ^{ゆかおよ} 衢 ^{ゆかおよ} に昇 ^{ゆかおよ} き出して、 ^{ゆかおよ} 床 ^{ゆかおよ} 及び ^{ゆかおよ}

^{とこ} 榻 ^お に置 ^す き、 ^{そのかげ} ペトル ^{あるい} の過 ^{これ} ぎて、 ^{おお} 其 ^{こいねが} 影 ^{いた} の或 ^{またおお} は之 ^{ひと} を陰 ^{ひと} わん ^{ひと} ことを ^{ひと} 冀 ^{ひと} う ^{ひと} に至 ^{ひと} れり。 ^{ひと} 又 ^{ひと} 衆 ^{ひと} くの ^{ひと} 人 ^{ひと}

^{きんぼう} は、 ^{しよゆう} 近 ^や 傍 ^{もの} の諸 ^{おき} 邑 ^{うれ} より、 ^{もの} 病 ^{たづさ} める者 ^{あつま} 及び ^{あつま} 汚 ^{あつま} 鬼 ^{あつま} を患 ^{あつま} うる者 ^{あつま} を ^{あつま} 攜 ^{あつま} えて、 ^{あつま} イエル ^{あつま} サリム ^{あつま} に ^{あつま} 集 ^{あつま} れり、

^{みない} 皆 ^え 愈 ^{しさいちよう} ゆる ^{およ} を得 ^{およ} たり。 ^{かれ} 司 ^{とも} 祭 ^{もの} 長 ^{もの} 及び ^{いたん} 凡 ^{ともがら} そ ^た 彼 ^た と ^た 偕 ^た に ^た する ^た 者、 ^た サド ^た ケイ ^た の ^た 異 ^た 端 ^た の ^た 徒 ^た は、 ^た 起 ^た

^{ねたみ} て、 ^み 嫉 ^{そのて} に満 ^{しと} てられ、 ^お 其 ^{これ} 手 ^{ひとや} を使 ^{くだ} 徒 ^{しか} に措 ^{しゆ} きて、 ^{つかい} 之 ^{よる} を公 ^{ひとや} 獄 ^{ひとや} に下 ^{ひとや} せり。 ^{ひとや} 然 ^{ひとや} れども ^{ひとや} 主 ^{ひとや} の ^{ひとや} 使 ^{ひとや} 夜 ^{ひとや} 獄 ^{ひとや} の

^{もん} 門 ^{ひら} を啓 ^{かれら} き、 ^ひ 彼 ^{いだ} 等 ^い を引 ^ゆ き出 ^{でん} して ^た 曰 ^こ えり、 ^{せい} 往 ^{ことば} きて、 ^{ことごと} 殿 ^{たみ} に立 ^{たみ} ち、 ^{たみ} 此 ^{たみ} の ^{たみ} 生 ^{たみ} 命 ^{たみ} の ^{たみ} 言 ^{たみ} を ^{たみ} 悉 ^{たみ} くの ^{たみ} 民 ^{たみ} に

^{かた} 語 ^{かた} れ。

(比較用 口語訳) そのころ、多くのしるしと奇跡とが、次々に使徒たちの手により人々の中で行われた。そして、一同は心をつにして、ソロモンの廊に集まっていた。ほかの者たちは、だれひとり、その交わりに入ろうとはしなかったが、民衆は彼らを尊敬していた。しかし、主を信じて仲間に加わる者が、男女とも、ますます多くなってきた。ついには、病人を大通りに運び出し、寝台や寝床の上に置いて、ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにしたほどであった。またエルサレム附近の町々からも、大ぜいの人が、病人や汚れた霊に苦しめられている人たちを引き連れて、集まってきたが、その全部の者が、ひとり残らずいやされた。そこで、大祭司とその仲間の者、すなわち、サドカイ派の人たちが、みな嫉妬の念に満たされて立ちあがり、使徒たちに手をかけて捕え、公共の留置場に入れた。ところが夜、主の使が獄の戸を開き、彼らを連れ出して言った、「さあ行きなさい。そして、宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい」。

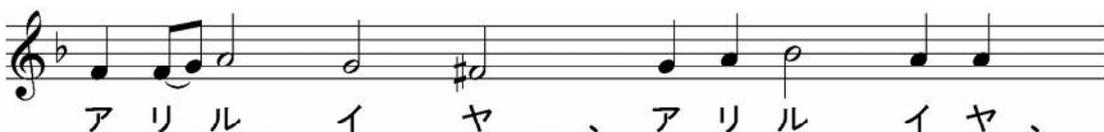
【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平 ^{へいあん} 安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神 ^{しん} にも、

司祭) ^{えいち} 睿 ^{えいち} 智、

誦經) アリルイヤ、





誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



誦經) ^{けだししゅ おおい かみ おおい おう しょしん まさ} 蓋主は大なる神、大なる王にして諸神に勝る、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書65端 20章19~31節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、是の日、即七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の門、
 イウデヤ人を懼るるに困りて閉ぢたるに、イイスス來りて、中に立ちて、彼等に謂う、爾等
 に平安。此を言いて、彼等に己の手足及び脅を示せり。門徒主を見て喜べり。イイ
 スス復彼等に謂えり、爾等に平安、父が我を遣しし如く、我も亦爾等を遣す。此
 を言いて、氣を噓きて、彼等に謂う、聖神を受けよ。爾等人に其罪を釋さば、則釋さ
 る、人に其罪を留めば、則留めらる。イイススの來りし時、十二の一なるフォマ、
 稱してディディムと云う者、彼等と偕に在らざりき。他の門徒彼に謂えり、我等主を見
 り。然れども彼は之に謂えり、我若し其手に釘の迹を見ず、我が指を釘の迹に入れず、我
 が手を其脅に入れずば、信ぜざらん。八日を越えて、門徒復内にあり、フォマも彼等と偕に
 せり。門閉ぢたるに、イイスス來りて、彼等の中に立ちて曰えり、爾等に平安。次ぎてフ
 オマに謂う、爾の指を此に伸べて、我が手を見よ、爾の手を伸べて、我が脅に入れよ、信
 ぜざる勿れ、乃信ぜよ。フォマ答えて彼に謂えり、我が主よ、我が神よ。イイスス彼に
 謂う、爾は我を見しに縁りて信ぜり、見ずして信ずる者は福なり。イイススは其門徒の
 前に於て、亦他の多くの奇蹟、此の書に載せざる者を行えり。此を載せたるは、爾等
 がイイススは神の子、ハリストスなりと信じ、且信じて、其名に困りて生命を得ん爲なり。

(比較用 口語訳) その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分
 たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。
 そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスはまた彼らに
 言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。
 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪
 でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。十二弟子のひとりで、デド
 モと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。ほかの弟子たちが、彼

に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。それからトマスに言われた、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※ 聖体礼儀③ へ